



Red Hat OpenShift Local 2.22

リリースノートおよび既知の問題

Red Hat OpenShift Local 2.22 の主な機能および特定された問題

Red Hat OpenShift Local 2.22 リリースノートおよび既知の問題

Red Hat OpenShift Local 2.22 の主な機能および特定された問題

Fabrice Flore-Thebault
ffloreth@redhat.com

法律上の通知

Copyright © 2023 Red Hat, Inc.

The text of and illustrations in this document are licensed by Red Hat under a Creative Commons Attribution–Share Alike 3.0 Unported license ("CC-BY-SA"). An explanation of CC-BY-SA is available at

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/>

. In accordance with CC-BY-SA, if you distribute this document or an adaptation of it, you must provide the URL for the original version.

Red Hat, as the licensor of this document, waives the right to enforce, and agrees not to assert, Section 4d of CC-BY-SA to the fullest extent permitted by applicable law.

Red Hat, Red Hat Enterprise Linux, the Shadowman logo, the Red Hat logo, JBoss, OpenShift, Fedora, the Infinity logo, and RHCE are trademarks of Red Hat, Inc., registered in the United States and other countries.

Linux[®] is the registered trademark of Linus Torvalds in the United States and other countries.

Java[®] is a registered trademark of Oracle and/or its affiliates.

XFS[®] is a trademark of Silicon Graphics International Corp. or its subsidiaries in the United States and/or other countries.

MySQL[®] is a registered trademark of MySQL AB in the United States, the European Union and other countries.

Node.js[®] is an official trademark of Joyent. Red Hat is not formally related to or endorsed by the official Joyent Node.js open source or commercial project.

The OpenStack[®] Word Mark and OpenStack logo are either registered trademarks/service marks or trademarks/service marks of the OpenStack Foundation, in the United States and other countries and are used with the OpenStack Foundation's permission. We are not affiliated with, endorsed or sponsored by the OpenStack Foundation, or the OpenStack community.

All other trademarks are the property of their respective owners.

概要

このドキュメントでは、Red Hat OpenShift Local 2.22 の新機能および改善された機能を紹介합니다。また、ソフトウェアの使用中に発生する可能性のある問題に関する情報も含まれています。可能な場合は、特定された問題に対する回避策を説明します。

目次

| | |
|----------------------------------|----|
| 多様性を受け入れるオープンソースの強化 | 3 |
| 第1章 リリースノート | 4 |
| 1.1. コンポーネントのバージョン | 4 |
| 1.2. 最小システム要件 | 4 |
| 1.3. 変更点および改善点 | 6 |
| 1.4. 主な機能拡張 | 6 |
| 1.5. テクノロジープレビュー | 6 |
| 1.6. 大きな変更 | 6 |
| 第2章 既知の問題 | 8 |
| 2.1. 一般的な問題 | 8 |
| 2.2. MICROSOFT WINDOWS の問題 | 9 |
| 2.3. MACOS の問題 | 10 |

多様性を受け入れるオープンソースの強化

Red Hat では、コード、ドキュメント、Web プロパティにおける配慮に欠ける用語の置き換えに取り組んでいます。まずは、マスター (master)、スレーブ (slave)、ブラックリスト (blacklist)、ホワイトリスト (whitelist) の 4 つの用語の置き換えから始めます。この取り組みは膨大な作業を要するため、今後の複数のリリースで段階的に用語の置き換えを実施して参ります。詳細は、[Red Hat CTO である Chris Wright のメッセージ](#)をご覧ください。

第1章 リリースノート

これらは、Red Hat OpenShift Local 2.22 製品の最も重要な機能とバグ修正です。

1.1. コンポーネントのバージョン

Red Hat OpenShift Local 2.22 には、以下のバージョンの主要コンポーネントがあります。

表1.1 Red Hat OpenShift Local、コンポーネントバージョン

| コンポーネント | バージョン |
|-------------------------------------|---------|
| OpenShift Container Platform | 4.13.3 |
| OpenShift クライアントバイナリー (oc) | v4.13.3 |
| Podman バイナリー | 4.4.4 |

1.2. 最小システム要件

Red Hat OpenShift Local の最小ハードウェアおよびオペレーティングシステムの要件は以下のとおりです。

1.2.1. ハードウェア要件

Red Hat OpenShift Local は、次のアーキテクチャーでサポートされています。

表1.2 プリセットとアーキテクチャーの互換性

| プリセット | AMD64 | Intel 64 | M1 |
|------------------------------|-------|----------|----|
| OpenShift Container Platform | はい | はい | はい |
| MicroShift | はい | はい | はい |
| Podman container runtime | はい | はい | はい |

Red Hat OpenShift Local は、ネストされた仮想化をサポートしていません。

必要なコンテナランタイムに応じて、Red Hat OpenShift Local には次のシステムリソースが必要です。

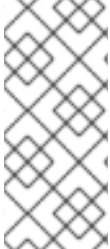
1.2.1.1. OpenShift Container Platform の場合

- 物理 CPU コア 4 個
- 空きメモリー 9 GB

- ストレージ領域の 35 GB

1.2.1.2. MicroShift の場合

- 物理 CPU コア 2 個
- 空きメモリー 4 GB
- ストレージ領域の 35 GB



注記

OpenShift Container Platform および MicroShift プリセットを Red Hat OpenShift Local インスタンスで実行するには、これらの最小限のリソースが必要です。一部のワークロードでは、より多くのリソースが必要になる場合があります。Red Hat OpenShift Local インスタンスにより多くのリソースを割り当てる方法は、[インスタンスの設定](#)を参照してください。

1.2.1.3. Podman コンテナランタイムの場合

- 物理 CPU コア 2 個
- 空きメモリー 2 GB
- ストレージ領域の 35 GB

1.2.2. オペレーティングシステム要件

Red Hat OpenShift Local には、サポートされるオペレーティングシステムの最小バージョンが必要です。

1.2.2.1. Microsoft Windows の要件

- Microsoft Windows では、Red Hat OpenShift Local に Windows 10 Fall Creators Update (バージョン 1709) 以降が必要です。Red Hat OpenShift Local は、Microsoft Windows の以前のバージョンでは動作しません。Microsoft Windows 10 Home Edition はサポートされません。

1.2.2.2. macOS の要件

- macOS では、Red Hat OpenShift Local に macOS 11 Big Sur 以降が必要です。Red Hat OpenShift Local は、以前のバージョンの macOS では機能しません。

1.2.2.3. Linux の要件

- Linux では、Red Hat OpenShift Local は、最新の 2 つの Red Hat Enterprise Linux/CentOS 8 および 9 マイナーリリースと最新の 2 つの安定した Fedora リリースでのみサポートされます。
- Red Hat Enterprise Linux を使用する場合は、Red Hat OpenShift Local を実行するマシンが [Red Hat カスタマーポータルに登録されている](#) 必要があります。
- Ubuntu 18.04 LTS 以降および Debian 10 以降はサポートされておらず、ホストマシンの手動設定が必要になる場合があります。

- Linux ディストリビューションに必要なパッケージをインストールするには、[必要なソフトウェアパッケージ](#) を参照してください。

1.3. 変更点および改善点

これらは、Red Hat OpenShift Local 2.22 で導入されたいくつかの重要な変更です。

1.4. 主な機能拡張

- 開発およびテスト目的で Red Hat OpenShift Local を使用できます。
- Red Hat OpenShift Local は、以下のいずれかのプリセットをコンピューターにインストールします。

openshift

事前設定済みの最小限の OpenShift Container Platform 4.13 クラスター

microshift

MicroShift.

podman

Podman コンテナランタイム

- プリセットは、次のプラットフォームのネイティブハイパーバイザー上の Red Hat Enterprise Linux 仮想マシンで実行されます。
 - Linux
 - macOS
 - Microsoft Windows 10

1.5. テクノロジープレビュー

これらの機能のサポートは、[テクノロジープレビュー機能のサポート範囲](#) の対象となります。

- Red Hat OpenShift Local 2.22 には、**crc bundle generate** コマンドを使用して、現在実行中のクラスターに基づいてカスタムバンドルを作成する機能が含まれています。このコマンド、そのパラメーター、および動作は、今後のリリースで互換性のない方法で変更される可能性があります。

1.6. 大きな変更

- Red Hat OpenShift Local 2.22 は、組み込みの OpenShift プリセット (**openshift**) で OpenShift Container Platform 4.13.3 を提供します。
- Red Hat OpenShift Local 2.22 は、組み込み Podman コンテナエンジンプリセット (**podman**) で Podman 4.4.4 を提供します。
- Red Hat OpenShift Local 2.22 は、組み込み MicroShift プリセット (**microshift**) で MicroShift 4.13.3 を提供します。

1.6.1. **crc config get** プロパティーが設定されていない場合にデフォルト値を返す

以前は、設定にデフォルト値が含まれている場合、**crc config get** はエラーコードを返していました。今回の更新により、デフォルト値が返されるようになりました。

関連情報

- [#3678](#)

1.6.2. セットアップ中のダウンロードエラーを修正

以前は、セットアップが **unable to get verified hash for default bundle** エラーで失敗していました。この更新により、**crc setup** におけるバンドルハッシュのダウンロードエラーが修正されます。

関連情報

- [#3686](#)

1.6.3. MicroShift プリセットのディスクのサイズ変更

以前は、MicroShift プリセットディスクのサイズを変更できませんでした。この更新により、MicroShift プリセットのディスクサイズ変更機能が追加されます。

関連情報

- [#3624](#)

1.6.4. コンテナ内からの DNS ルックアップを修正

以前は、Red Hat OpenShift Local DNS サービスからの DNS メッセージが 512B を超える可能性があり、一部のクライアントがメッセージの処理に失敗することがありました。この更新により、DNS メッセージが圧縮され、コンテナは DNS メッセージを正常に処理できるようになりました。

関連情報

- [#3643](#)

第2章 既知の問題

Red Hat OpenShift Local 2.22 のユーザーに発生する可能性がある問題、およびこれらの問題の可能な回避策。

2.1. 一般的な問題

すべてのサポート対象プラットフォームに影響する問題。

2.1.1. プロキシ設定が Podman プリセットに不適切に適用されている

crc config set コマンドを使用して設定されたプロキシ設定は、Podman プリセットが使用されていると、Red Hat OpenShift Local に埋め込まれた **podman-remote** バイナリーでは使用されません。

2.1.2. Red Hat OpenShift Local はデフォルトでメトリックを無効にする

Red Hat OpenShift Local が一般的なノートブックで確実に実行できるようにするために、Red Hat OpenShift Local は、Prometheus や関連するすべての監視、アラート、テレメトリー機能など、リソースを大量に消費するサービスを無効にします。これらの機能を有効できます。

手順

1. 追加のリソースを割り当てるには、[仮想マシンの設定](#) を参照してください。
2. [監視、アラート、およびテレメトリーの開始](#) を参照してください

これらの機能を有効にした後は、監視を無効にすることはできません。

回避策

監視を再度無効にするには、以下を実行します。

1. 仮想マシンを削除します。

```
$ crc delete
```

2. 仮想マシンを作成します。

```
$ crc start
```

2.1.3. 多くの Operator を有効にすると、デフォルトよりも多くのメモリーが必要になる

crc start コマンドは、デフォルトで 9 GiB のメモリーを Red Hat OpenShift Local の仮想マシンに割り当てます。多くの Operator を有効にすると、メモリー要件が増加する可能性があります。

回避策

- 追加のメモリーを割り当てるには、[仮想マシンの設定](#) を参照してください。

2.1.4. 最初の nameserver が IPv6 の場合は、Red Hat OpenShift Local が機能しない

最初の **nameserver** が IPv6 の場合は、Red Hat OpenShift Local 仮想マシンへの DNS 解決が失敗することがあります。

回避策

- **-n** フラグを使用して、Red Hat OpenShift ローカル仮想マシンを起動する際は、IPv4 **nameserver** を指定します。

```
$ crc start -n 8.8.8.8
```

2.1.5. **crc setup** を実行すると既知のエラーが発生する場合がある

crc setup コマンドを実行すると、次のエラーが発生する場合があります。

```
unable to get verified hash for default bundle: Get "https://developers.redhat.com/content-gateway/file/pub/openshift-v4/clients/crc/bundles/openshift/4.12.13/sha256sum.txt.sig": context deadline exceeded (Client.Timeout exceeded while awaiting headers)
```

回避策

- エラーが解決されるまで **crc setup** コマンドを実行してみてください。

2.2. MICROSOFT WINDOWS の問題

このセクションでは、Microsoft Windows ホストのユーザーに影響する Red Hat OpenShift Local の問題を説明します。

2.2.1. Microsoft 標準インストーラー (MSI) を使用したインストール後のインストールの完了

手順

1. MSI インストーラーを使用して、Red Hat OpenShift Local をインストールします。
2. コンピューターを再起動します。
3. コマンドプロンプトまたは PowerShell で次のコマンドを実行します。

```
$ crc setup
```

2.2.2. **crc cleanup** コマンドが権限エラーで失敗する場合がある

コマンド間でホストコンピューターを再起動せずに、**crc setup** に続いて **crc cleanup** を実行すると、**crc cleanup** で次のエラーが報告されます。

```
Post "http://unix/clean": open \\.\pipe\crc-admin-helper: Access is denied.
```

回避策

1. コンピューターを再起動します。

2. 以下のコマンドを実行します。

```
$ crc cleanup
```

2.2.3. %WINDRIVE% の外部で実行すると、予期しない動作が発生する

ネットワークドライブから **crc** バイナリーを起動すると、Hyper-V ドライバーが失敗します。

回避策

- **crc** バイナリーを %WINDRIVE% 上の場所に移動します。
%WINDRIVE% は通常 **C:** に設定されます。

2.2.4. Red Hat OpenShift Local が PowerShell での FullLanguage サポートを想定

Red Hat OpenShift Local は、システム管理者が決定した例外を除いて、**ConstrainedLanguage** PowerShell モードをサポートします。

2.2.5. crc oc-env コマンドが %PATH% の特殊文字では機能しない

Microsoft Windows では、PowerShell およびコマンドプロンプトが UTF-8 エンコーディングを使用しません。したがって、%PATH% に存在する特殊文字を使用して、**crc oc-env** コマンドを実行すると UTF-8 文字が正確にエンコードされません。

回避策

- 特殊文字を含まない場所に **crc** バイナリーを移動します。

関連情報

- Red Hat OpenShift Local 機能の概要と **OpenShift Container Platform** の紹介は、[Red Hat OpenShift Local スタートガイド](#) を参照してください。
- [Red Hat Bugzilla](#) の **crc** コンポーネントを備えた **OpenShift Container Platform** 製品 を使用して、Red Hat OpenShift Local の問題を報告するか、機能を依頼してください。

2.3. MACOS の問題

このセクションでは、macOS ホストのユーザーに影響する Red Hat OpenShift Local の問題を説明します。

2.3.1. ハイバネートにより、仮想マシンの時間が非同期に

Red Hat OpenShift Local 仮想マシンの時刻は、ホストの時刻と非同期になる可能性があります。この問題は、ホストマシンがハイバネートに入る際に Red Hat OpenShift Local 仮想マシンが実行している場合に発生します。

回避策

1. Red Hat OpenShift Local 仮想マシンを停止します。

```
$ crc stop
```

2. Red Hat OpenShift Local 仮想マシンを再起動します。

```
$ crc start
```